
山羊と乙女

森田カラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山羊と乙女

【Nコード】

N1315G

【作者名】

森田カラス

【あらすじ】

「誰の娘だとか、誰の兄弟だとか、そんなことはどうだっていいの。私が、私という人間として生きていければ」腹違いの俺の妹は、そう強く言った。

知らない男

名前も知らない男が、私の父親は死んだと言った。

その男は、まだ夏の日差しが残る頃にやって来た。

家の庭の向日葵も綺麗に咲いていたし、蝉も引っ切り無しに鳴いていた。

そんな爽やかな夏の終わり時に、その男は「先日、樋口実篤が息を引き取りました」と静かに言った。その場には（今の）父も母も確かに居たのだが、私は一人で聞いているような錯覚に陥った。リビングのエアコンの音も聞こえなかった、あれだけうるさく鳴いていた蝉の声も聞こえなかった。窓から見えた庭の向日葵は「どうしたの、あきちゃん？ 夏には似合わない青ざめた顔をしているよ」と言っているようで、自分の顔を触ってみると、氷のように冷たかった。

「あの……正確には……いつ亡くなったんでしょうか」

母は口を開いたが、いつもの母の、早口な喋りではなくなっていた。

（今の）父はそれに気づいてか知らずか、胡坐をかいていたのを正座に座りなおした。

「正確には、8月の30日です。タクシーの中で息を引き取ったそうです」

（今の）父も母も黙り込んで、それ以上何を聞くことも無かった。男は帰る際に、自分の名刺を私に渡して「いつでもいいから、お線

香だけでもあげに来てくれ」と言って帰っていった。
その後の家の空気は、いつもより息苦しくなった。

知らない男（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

行くべきではない

「つまり、その男の人は、晶子の前のお父様が死んだって言ったのね？」

「そう」

「その男の人の名前が、樋口高志さん」

「名刺を貰ったの。裏に携帯の電話番号が書いてあった」

「でも晶子は、その、樋口高志さんの事は知らなかったんでしょう？」

前のお父様にも、今のお家の事は教えてなかったんでしょう？」

「だから、よくわからなくて。 どうやって家の事を知ったのか」

あの男が……樋口高志が前触れもなく家に来てから、二週間ほど経っていた。

家の空気は相変わらず息苦しいままで、私は高校の授業が終わると、クラブにも行かずに

その足で友人のスマレの家に行つては、毎日、日が暮れるまで話をしていた。

スマレの家はいわゆる“お金持ち”の家で、まるで小さい森のような広い庭の中に、迎賓館のように豪華な、白壁の家を構えていた。スマレは、両親の事をあまり語らないので（語りたくなさそうだった）詳しいことは知らないが

両親が共働きで家に居るときも少なく、家政婦が居るもの

「親が居ないと気楽でいいけど、こんな広い家に一人で居るのは、やっぱり寂しいものがあるわね」と言っていた。

「で、連絡は？」

「してない」

「そうよね……すぐにはできないわよ。」

私だって、腰は据わってると思ってるけど、今のあなたに何を言

「だったらいいか」

「その……スミレに言うべきかどうか、迷って。いらぬ心配してほしくなかったし。」

でも、完全に入り浸っているし、申し訳ないし」

私がそういうと、スミレは「友達でしょう、私達」と怒った。

正直、樋口実篤の墓前に、お線香をあげに行こうとは思えなかった。

母と実篤が別れたのは私が小学校低学年の時、あれからもう11年になる。

実篤のことは、もう忘れかけていた。

血の繋がった父親だといっても、私には今の父が私の父親であることに変わりは無かったし、私が行くのは場違いだと思った。

樋口高志に連絡を取るつもりも、到底なかった。

「それで、行くつもりは無いのね」

「私は外山家の娘なの、外山晶子なの、もう樋口実篤の娘じゃないの。私は行くべきじゃない」

「そりゃあ、あなたの言い分が分からないわけじゃないけど。その……誰だったかしら」

「樋口高志ね」

「その樋口高志さんの気持ちも考えてみなさいよ。わざわざ晶子のお家を調べてまで、お父様の死を知らせてくれたのよ」

「きっと合法的な調べ方じゃないよ、そんな気がする」

「調べ方の合法、非合法はどうだっていいのよ。お線香をあげに行く、行かないにしても、連絡はするべきだわ。それが筋よ」

スミレにはそう言われたが、私はあまり乗り気にはならなかった。電話をして、留守番電話サービスに繋がったのなら、自分の用件だけ言って電話を切る事が出来る。

でも、もしも樋口高志が出てしまったら、一体、どんな風に話せばいいやら。

行くべきではない(後書き)

お読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315g/>

山羊と乙女

2010年11月14日09時21分発行